

福生の遺跡

——福生一中東側段丘上を掘る——

和田 哲



福生市史の原始・古代部門を担当して約一年半が経過しましたが、この間の調査につき、概要を報告します。我々に与えられた最初の課題は、目的とする市史を作り上げるために、如何なる姿勢で、どのような方法で調査を進めるかという問題です。そこで、従来の知見や研究成果を活かしながら、広く市民の協力を得、基礎的資料の再認識をはかる目的で、次の事項を重点に、初年度調査を計画・実施しました。

I 調査の基本方針

原始・古代部門では、福生市に関する直接的な文献等の記録資料は存在しない。そこで、考古学的資料を中心に、

次の三項目を主体に調査を進めることとなった。すなわち、
①市内の遺跡分布調査（遺跡の現状を把握するとともに、宅地化などによってすでに破壊された遺跡なども再確認するため、市内全域の踏査を行う。）

②市内出土遺物の実測・写真撮影（個人的に所蔵されている考古資料の情報を広く市民から求め、資料の収集に努める。）

③遺跡の試掘調査（前記二項目の調査結果を踏まえ、地点を選定して試掘を行う。この際、発掘調査に助力いただける市民の参加を求め、協力を願う。）

以上の三項目を基本方針として初年度の調査を実施した。その結果、今後補って行かなければならない点も多々ある

が、大略、次に述べるような成果を得ることができた。

①の遺跡分布調査は、本市においては『福生町誌』編さんの段階で二、三の遺跡が注目されていた。ところが、昭和四二年の東京都文化財総合調査結果をまとめた『西多摩文化財総合調査報告』には、福生町の項には長沢遺跡のみしか記述がない。しかし、その後昭和四九年に発行された『東京都遺跡地図』には市内一四か所の遺跡が記載されており、当時の開発促進にともなう遺跡の破壊と、それに対応する調査研究の進展が窺える。その後、昭和五二年にC・T・キーン氏を中心に福生市教育委員会がまとめた『福生市の遺跡』では二遺跡が追加され、計一六遺跡が登載されており、現在の遺跡数はそれ以上増加してはいない。今回、再度分布調査と遺跡地の現状確認を実施したが、長沢遺跡以外は、非常に遺物の散布が希薄で、踏査してもほとんど遺物採集ができない状況にある。また、宅地化によってすでに湮滅した遺跡や、現状では遺跡としての認定がむずかしいようなものも含まれていることが判明した。ところで、市内の遺跡は時期的分布にきわめて偏りがみられる。すなわち、一六か所の遺跡中一五か所は縄文時代の遺跡で占められており、時期不明の一遺跡と他に四遺跡から土師器・須恵器の小片が見出されているに過ぎない。要するに、市内遺跡の大部分は原始時代、しかも縄文時代という非常に限られた時期のものであること、さらに古代

の遺跡が大変不明確であるという現状を認識して、市史のスタートを切らざるを得ないのである。

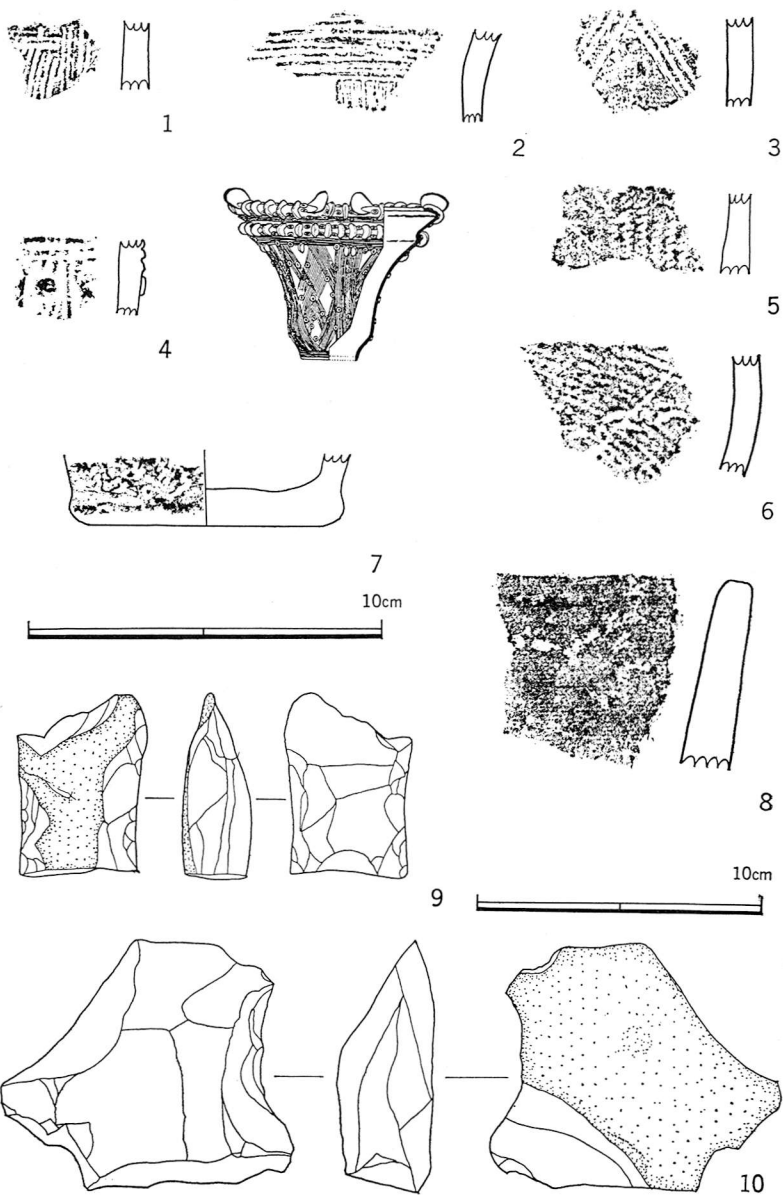
②の遺物実測・写真撮影等については、すでに報告書などの刊行されている調査例以外、まだ情報が不十分で、これから市民の協力を得て、資料の収集に努力したい。

③の遺跡試掘調査は、遺跡分布調査の結果に基づいて計画されるものであるが、従来未調査の遺跡を優先的に行うこととした。市内でこれまでに正式の発掘調査がなされた遺跡は、縄文早期の不動尊遺跡、過去七次にわたって発掘が行われている縄文中期の長沢遺跡、縄文前期と後期の遺物を少量出土した福生市1号遺跡の三遺跡である。

こうした状況の中で、市史編さんのためには、小規模な遺跡であっても試掘を実施し、遺跡の性格、内容をより鮮明にする必要がある。そこで、昭和五九年度は福生市13号遺跡の試掘を行い、昭和六〇年度以降逐次試掘を行うこととした。そして、最終的には、市内全遺跡のより詳細なデータを集積し、福生市域で展開された原始・古代人の生活の様相を復元することが肝要である。

II 福生市13号遺跡の試掘調査

福生市13号遺跡は、福生市能川一三三九、同一三四四番地付近一帯を占めている。遺跡は福生市立第一中学校東側の段丘上にあり、八高線線路の西側一帯に広がっている。



福生市13号遺跡出土の遺物（スケールの下は石器）

この段丘は福生市域では最上位の立川段丘で、縄文早期の不動尊遺跡や本遺跡のような縄文前期遺跡が主体となっている。それに対し、縄文中・後期以降の資料は断片的にし、認められず、中期以降縄文人の生活舞台の中心が、一段下位の拝島段丘上に移行したことを物語っている。

13号遺跡はかつてC・T・キーン氏によって遺物採集が行われており、『福生市の遺跡』によれば、

「一九七〇年以來、この畑にて縄文前期の諸磯B式土器片約五〇点、縄文中期と推定される土器片数点、打製石斧一点、剝片二点、平安時代初期の国分式土師器三点が発見された。尚、諸磯B式土器片の内一点の表面にはどんぐりによる圧痕に酷似している跡が認められた。」

一九七〇年の最初の表面採集時には遺跡の全地域が、まだ空地であったが、その後、住宅地として整備が進み、遺跡の大半は荒され、年毎になされる住宅工事や道路建設により、遺跡の重要な地区が破壊の脅威に晒されている。」

と当時の状況を伝えている。遺跡地の現況は畑地及び宅地で、筆者が踏査した折に、遺跡南端部の貸農園内に多量の焼礫が掘り出されていることを発見し、集石遺構の一部が破壊されていることに気付いた。そこで、ぜひこの部分を試掘したいと思ひ接渉したが、諸般の事情から実現できず、止むなく遺跡北端部の畑地を試掘することとなった。

発掘調査は昭和五九年一月二三日、二六日の四日間実

施し、幅二メートル、長さ一メートルのトレンチ三本と同幅で長さ一二メートルと二五メートルの計五本のトレンチを設定して行った。調査は厳寒の中で行われたが、福生市高齢者事業団の皆様にご協力いただき、能率的に実施された。その後、遺物洗い、注記、実測、トレースなど一連の整理作業を行った。

調査地点での土層堆積は大旨次の通りである。

第I層……黒色土層。畑の耕作土で層厚三〇センチ程度。

第II層……褐色土層。三〇〜四五センチの層厚を有し、遺物はこの層の中位以上に包含されている。

第III層……ソフト・ローム層。茶褐色、厚さ五〇センチ。

第IV層……ハード・ローム層。黄褐色、層厚三〇センチ。

第V層……礫層。

今回の調査地点からは、特に遺構と呼べるようなものは検出されなかった。しかし、現地表下四〇〜五〇センチの一定の深さから土器・石器・石片が検出されたことが注目される。このことは第II層中位が縄文前期の生活面であったことを証明している。試掘によって発見された遺物は、土器一片、石器二、石片六〇、計七三点である。

土器はいずれも小片で、一片縄文中期のものを含むが、他はすべて縄文前期に比定される。器形は深鉢形で、図7の底部を除けば全て胴部破片である。胎土に砂粒を混え、黄褐色・暗褐色を呈し、厚さ六〜七ミリ前後の比較的焼成

のよい土器である。文様は1と4が半截竹管による平行線を主体とし、特に4はその上から丸や細長い粘土塊を貼り付けている。こうした特徴の土器は縄文前期諸磯C式と呼べ、中部山岳地域から関東地方に広く分布する土器群である。4の右は参考に揚げた長野県下島遺跡出土の完形土器で、4の破片はこれとほぼ同じ土器の胴部に相当する。5と7は縄文のみの文様であるが、同じく諸磯式の仲間である。諸磯式土器は神奈川県三浦市諸磯遺跡出土の土器を標式として命名されたもので、多摩地区にもこの型式の土器を出土する多くの遺跡がある。近い所では秋川市草花、同市二宮神社付近、同市前田耕地、八王子市平町遺跡などがあり、福生市13号遺跡の縄文人とほぼ同じ頃、これらの地域にも人が住んでいたことを物語っている。それは放射性炭素C¹⁴の年代測定によれば、今から約五千年前のことである。なお、諸磯C式は草花遺跡の土器に因んで、草花式と呼ぶ学者もあり、本地域と関わりの深い土器でもある。

8は無文の口縁部破片で、厚さ一三ミリと部厚く、縄文中期勝坂式と推定される。縄文中期土器片が発見されたことは、この時期にこの場所で狩猟・採集など、何らかの縄文人の活動が行われたことを物語り、たった一片の土器がそれを証明する有力な資料となる貴重な存在である。

次に、石器は二点発見された。図9は砂岩製の打製石斧で、中央から先を欠損している。打製石斧は通常土掘りの

用具と考えられ、恐らく柄を着けて使用しているうちに折損したものとされる。苦心して製作した石器を破損してしまった縄文人の無念さが伝わってくるような思いがする。10は礫器で、物を打ち割るのに使用した素朴な石器である。他に、13号遺跡で注目すべきものは、土器・石器と同一レベルから、人為的に打ち割られた多数の石片が発見されたことである。これら礫の中には、石器製作の途上で生じた剥片と思われるものもあるが、単なる破碎礫も含まれており、一概に石器製作と関連づけるわけにもいかない。これら石片のもつ意味は、今後の研究課題として検討したい。

以上、福生市13号遺跡試掘調査の概要をまとめて報告したが、調査範囲が限定されていたため、遺跡の性格を十分に把握するには至っていない。しかし、福生市域で初めての縄文前期に関する確実な資料を得た意義は大きい。今後、更に調査を続け、本遺跡の実態に迫りたいと思う。

編集専門委員 横頭 和田 哲さとし 「原始・古代」担当



昭和十一年昭島市生れ。早稲田大学教育学部卒。立川女子高等学校教諭、女子美術大学講師、日野市・国立市遺跡調査団長、昭島市文化財保護審議委員など。著書に『西上遺跡』『浮島系土器の諸問題』など。昭島市在住。